

年間第16主日

第一朗読 創世記 18・1-10a
第二朗読 コロサイ 1・24-28
福音朗読 ルカ 10・38-42

2025.7.20 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日の第一朗読では創世紀から朗読されましたが、その中で、アブラハムが、自分の住んでいるテントの前にやってきた旅人を迎え入れて、食べ物を出し、そして休息をできるようにしてもてなす。そしてそれが実は神様でしたっていう、そういうお話になってくるわけですが、アブラハムが旅人を迎えるときに、「どうぞ、ここを通りかかったのですから、わたしのところに来てください」っていうふうに、アブラハムのほうからお願いしているところがちょっと不思議な感じがします。昔話なんかでは大体、旅人のほうが「一晩泊めてもらえませんか」とかお願いしてくるっていうパターンですけども、聖書の今日のお話では、アブラハムのほうが旅人をお願いして、でも旅人のほうはテントの前に立っているんで泊めてもらう気満々って言いましょうかね——なんだけど、でもお願いしているのはアブラハムのほうなんだというところが不思議な感じがしますが、当時の、あるいは遊牧民の文化においては、旅人を通して情報を得る——どこの地方で何が起きているとか、どこが豊作だとか、そういうようなことが旅人を通してしか情報を得ることができないので、そういう意味ではお願いして来てもらうっていうことも不思議ではないわけですが、それがむしろ強調されている。アブラハムのほうが何かいろんな物や、食べ物や、水や、そういうものを、提供するほうをお願いして提供させてもらっている。そういうことが強調されていますね。

似たような情景をわたしはミャンマーで見たことがあるんです。東京の教会とミャンマーの教会はずっと密接な繋がりがあって、今もわたしたちは共同祈願の中でミャンマーのことを念頭にお祈りしているわけですが、前にミャン

マー委員っていうのだったときに何度かミャンマー行って、ミャンマーの——特にその中心的な民族であるビルマ族の間では仏教が社会の中で非常に浸透しているの、毎日托鉢のお坊さんたちの行列あるいはあの小坊主さんたちの行列とかを町で見ない日はないぐらいなんです。で、托鉢の大きな鉢を持って町を巡っている中で、信者の人というか、町の人がお辞儀をして、そしてその鉢の中に食べ物を——食べ物だけです——食べ物を、でもいろんな食べ物を入れるというのがあって、でもお坊さんはそれに対してお礼とかお辞儀したりはしないわけなんです。あげるほうがお辞儀して、その中に入れる。それは、食べ物を鉢の中に入れることを通して自分が功德くどくを積む、そういう機会を与えてくださってありがとうございますっていう、そういう意味のようなんです。だから、お坊さんがそれにお礼を返しちゃったら、もうそこで功德が終わっちゃうから、あえてしないというようなことのようなんですが、逆に今度はお坊さんのほうは、その寄進してきたというか、その功德を全く無駄にならないように、頂いた食べ物は全部食べる、それも修行の一つのようなので、場合によっては太ってきちゃうところもあるんですけども（笑）、でもそれはお坊さんが墮落してるからじゃないんですね。わたしたちの目から見ると、ミャンマーの町の人には痩せてるのにお坊さんが太っているっていう、でもそれはもう全然違う。一つも頂いた物を無駄にしないように、っていうことの中で、場合によってはそういうようなことにもなるということのようなんですけども、それは、わたしが持っている、で、持ってない人にあげますっていう、目に見える物を持っている・持っていない、物をあげる・受け取るっていうものを越えた、実は、表面的には食べ物を渡しているようだが、恵みを受けているのは自分なのだっていう、目に見えない世界との繋がりから来る考え方がそこにはあるし、そのような態度がこの旧約聖書の中にあるアブラハムの姿の中にも見て取ることができるわけです。

それを、わたしたちは、「どんなことも神様を愛する機会として受け取ることができる」っていうふうに、キリスト教的には表現できますね。そういうものの見方、目に見える——あるいは唯物主義的な——物があるかないか、そしてそれ

を誰が持っているか、誰が渡すかっていうことを超えたものの見方は、まさに信仰——神様との繋がり——を通してのみと言って良いと思います。わたしたちが持つことができるし、それを通して、一人ひとりが日常で行うどんな些細な行為も神様を愛するっていう新しい意味を獲得して、そこにわたしたちは意味を見いだすだけではなくて、そこから色々な自分自身の生きる力や恵みを汲み取ることができるようになっていく、ということなんだと思うんです。

しかし、そういうものの見方っていうのは信仰を通してですから、神様からのプレゼント——わたしたちが何か一所懸命そう思い込もうとしてというよりは、そのようなものの見方にイエス様に繋がることを通して招き入れられて、目が開かれていく、そういう恵みとして考えることができます。

しかし、その「ものの見方」を簡単に見失ってしまう危険も常に伴っているんだというのが、今日の福音の中で、イエス様をお家^{うち}にお迎えしたマルタが一所懸命もてなしをしているうちに、そのことにしか目が行かなくなってしまうと、「わたしは一所懸命やっている、妹は何もしていない」っていう、自分のものの見方の中で、しているかしていないかっていう、目に写る現象だけに囚われていくというようなことになってしまうわけです。それに対してイエス様が優しく「マルタ、マルタ、あなたは心を乱している」というふうに諭されるのは、やはりわたしたちも同じように、ともすると神様との繋がりを忘れて、今自分が体験していることを自分の感じ方だけで押し量ってしまう、そこに戻って行ってしまっても、でも絶えずイエス様の呼びかけによって、また自分の姿を見直し、またイエスと共に色々なその自分自身の、また周りの人との繋がりを恵みという神様との繋がりという観点から見直す、そういうふうに絶えず招かれ、その招きにもう一回応えることができる、何度でも、という希望を表しているように思うんです。

今日、わたしたちも一人ひとり、マルタのように自分の心の家にイエス様をお迎えするっていう思いを新たにするためにこのごミサを捧げているとするならば、それを通して、いろんなことが——目に見えることだけではない——そこに

神様を愛するという意味をいつも込めることができるし、たとえ誰かに何かをしてあげてるといっても、実は恵みを頂いてるのは自分のほうなんだって思いの中で、ミャンマーの人たちがお坊さんにだけ良い態度を取るといよりは、それを通して——やってあげる・やってもらうっていう関係があっても——人間同士お互いに尊敬を持つっていうことに仏教の教えも繋がっていくためのそういう行為なんだと思うんですけども、わたしたち自身もやはり同じ信仰を持つ者として、目に見えるそういう関係だけではない、でも絶えずそれが恵みを通して神様に繋がる道をお互いに提供し合っているのだということ、目が開かれて生きる感謝の思いをもっと持つことができるようになったら良いなと思います。

今日、一人ひとりの中にまた訪れようとされるイエス様ご自身がわたしたちの心の目を開き、そして恵みの世界へ導いてくださる、その希望を持ってこのごミサをお捧げしたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>